

『看聞日記』現代語訳(二二二)

藺部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成(一三七一～一四五六)の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二(明治書院、二〇〇四年)である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳(一)～(二二) 応永三年～二九年(一四一六～二二)
 『米沢史学』三〇～三六号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五六号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四八号(二〇一四～二〇二二年)

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永三〇年(一四二三)一月一日から四月二九日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、(一)を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただし、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からの「示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』(講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年)

位藤邦生『伏見宮貞成の文字』(清文堂、一九九一年)

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七・別冊(明治書院、二〇〇二～二〇一四・二〇二二年)

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」

(同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年)

植田真平・大澤泉「伏見宮貞成親王の周辺―『看聞日記』人名比定の再検討―」

(『書陵部紀要』六六号、二〇一四年)

松岡心平編『看聞日記と中世文化』(森話社、二〇〇九年)

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」(『中近世

の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年)

松蘭斎『中世禁裏女房の研究』(思文閣出版、二〇一八年)

植田真平「伏見の侍―『看聞日記』人名小考―」(『書陵部紀要』七〇号、

二〇一九年)

応永三十年(伏見宮貞成数え年五十二歳)

応永三十年癸卯正月一日、空は晴れて風は静かだ。「永遠に続く世の始

まり、初春の季節。めでたい兆しが多岐に渡っていて、この上もなく

喜ばしい。すべての事において、とても幸せだ」と予祝した。いつも

のように朝早く三献のお祝いをした。夕食時には強飯を食べた。東御

方・廊御方・兄の妻であった上臈・私の妻である二条殿・今参、田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・慶寿丸も一緒だった。一献の祝宴をした。村人の小川禅啓や三木善理以下とも、いつものように対面した。

その後、銘茶を飲んだ。田向前参議や行豊朝臣にも銘茶一包みを与えた。田向前参議はまた酒を献上した。行豊朝臣が昨年から近所に引越して来たので、早々に参賀に来てくれたのは、うれしかった。

さて今日は朝廷の元日祝宴である。祝宴の執行責任者は久我清通大納言だそうだ。上皇様のお屠蘇のお相伴役は、西園寺実永前右大臣だという。

二日、晴。昨日と同様に新年のお祝いをした。長資朝臣・行豊朝臣が京へ出かけた。朝廷での祝宴出席や上皇御所での上皇様お菓のお給仕などのためだそうだ。夜に菌固め餅を食べて、いつものように長寿のお祈りをした。

三日、晴。新年の祈願と祝宴は昨日と同じである。長資朝臣が帰ってきた。朝廷の祝宴は夜明けに始められたが、天皇陛下のご臨席はなかったそうだ。歌い出しの役は木幡雅藤朝臣が希望したので、彼にその役を譲ったという。蔵人頭日野秀光朝臣以下が出席した。

上皇様お菓のお相伴は三が日ずっと西園寺実永前右大臣が務めたそうだ。

千秋万歳が来る

四日、晴。千秋万歳（せんずまんざい）の門付け芸人が来て、例年のようにめでたい言葉を述べていた。

田向前参議・重有・長資朝臣と大光明寺へお参りに行った。いつものように軽食が振る舞われた。

五日、晴。朝廷で叙位の儀式があり、執筆役は二条持基左大臣だという。

田向家で回茶をする

吉日なので、音楽会を始めた。平調の曲七つ・双調の曲十、朗詠などを自分一人で行い、新年をお祝いした。今夜は田向家で回茶（※）があった。

赤松出羽守が落馬して死ぬ

ところで赤松出羽守が室町殿御所から退出する時、落馬して、すぐに亡くなったそうだ。

※回茶（かいちゃ）：茶の種類を当てる遊び。回茶の話は、孔子の弟子顔回になんだもの。

万物が雨露の恩を浴びる

六日、新年になって初めて雨が降った。草木がようやく萌え出て、梅の花が既に開こうとしている。万物が雨露の恩を浴びている。めでたいことだ。吉日なので、湯浴みを始めた。

さて聞くところによると、昨日より上皇様はご病気だそうだ（※）。

※「ご病気だそうだ」：原文では「御歎楽と云々」と表記されている。七日、雨が降った。「人日（じんじつ）の佳い時節だ。正月（※）のめでたい兆しがあり、すべての事においても幸せだ」と予祝した。いつものように若菜のお祝いをして、その後、強飯をお供えた。田向前参議もお祝いに参加した。

今日の白馬宴会の執行責任者は徳大寺実盛大納言だそうだ。

中原師勝外記が叙位の記録を献上してきた。広橋兼宣大納言が一位、万里小路中納言が従二位の位を授けられた。それ以外はたいしたこと無かった。

夜に新年初の双六をした。私・重有・長資・行豊ら朝臣で遊んだ。行豊朝臣が勝った。賞品の扇や筆などを行豊に与えた。

※正月：原文では「王春」（おうしゅん）という季語（正月の異称）を用いている。

八日、晴。用健がいらっしやって、特別に新年の引き出物を進上して下さった。またお茶一袋もいただいた。惣得庵主や明元らも来て、一献の酒宴を準備してくれた。寿蔵主が酒樽一つを持参して新年の挨拶に来た。祝い酒が重なって、酒盛りになった。田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣も参加した。いつものように惣得庵主に引き出物を与えた。

後小松上皇は傷風で重体

九日、晴。上皇様のご病気は風邪(※)で、とても重体だそうだ。日本国中の者は皆、この事態に驚いている。

※「風邪」：原文では「傷風」と記されている。

十日、晴。上皇様のご病気お見舞いを冷泉永基朝臣を通して内々に行つた。永基にうまく上皇様へお伝えするよう、命じた。

長資朝臣が朝廷の小番に出かけた。勾当内侍殿へ新年のお祝いを申し上げるよう、長資に命じた。

十一日、夜に雨が降った。朝早く御香宮・山田宮・権現の三社に参詣した。田向前参議・重有朝臣・行豊朝臣・慶寿丸を連れて行つた。

後小松上皇が病気なので歌舞は控える

西大路隆富朝臣が一献の酒を持参して、新年の挨拶に来た。いつものように恒例の面々が一献の酒宴を準備してくれた。参議・重有・長資・行豊・隆富ら朝臣が酒宴に参加した。上皇様のご病気なので、歌や舞は控えた。そのため、少しも面白くなかった。それに松囃子の行列も来ない。

生島明盛と島田定直が新年の挨拶に来た。本来なら島田益直が挨拶に来るべきだが、上皇様に昼も夜もお仕えしているので、少しも時間に余裕がないそうだ。それで代わりに定直が来たという。対面したら、すぐに出ていった。明盛も一緒に帰っていった。彼も忙しいそうだ。

十二日、晴。陰陽師の賀茂在方がお祈り始めとして、御撫で物を献上し

てきた。その撫で物で身体を撫でまわし、すぐに返した。

上皇様のご病気の件で、田向前参議を使者として上皇御所へ派遣した。室町殿への御年賀状を勧修寺経興中納言に託してお送りした。

昼に大光明寺へ行つた。重有朝臣・行豊朝臣・隆富朝臣も行った。

まず仏殿で焼香し、次に塔頭大通院へ行き、焼香した。長老とお会いして、お茶のもてなしを受けた。いつものように杉原紙十帖と扇子の引き出物をいただいた。重有朝臣・行豊朝臣にも各々扇子を下さつた。その後、指月庵へ行き、すぐに帰つた。

綾小路信俊前参議が新年の挨拶に来て、一献の酒を持参した。それですぐに酒を飲んだ。重有・長資・行豊・隆富ら朝臣というように大勢が酒宴に参加した。

後小松上皇の病状

この一献の最中に、田向前参議が戻ってきた。上皇御所へ行き、冷泉永基朝臣を通して病気お見舞いを申し上げたそうだ。上皇様が直接、詳しいご返事を下さつた。今朝から少し病気は良くなったという。近臣が大勢詰めかけて上皇様にお仕えしている。その近臣の面々もご快復のご様子に安心していると田向に語つたそうだ。喜ばしいことである。

後小松上皇病気平癒のため、種々の祈禱が行われる

今日から朝廷で上皇様の病気回復のために、ご祈禱が始められた。型通りの尊勝法で山岡崎僧正が導師だそうだ。また七十六ヶ所へご祈禱するようにも陛下はお命じになった。それで石清水八幡宮や北野天満宮で、大般若経を省略しないで読経する法会が行われている。また仁和寺御室御所以下の諸門跡寺院では、宿坊などでご祈禱が行われているそうだ。今夜、陰陽師の安倍有富朝臣は、泰山府君を祭っているという。このようにさまざまご祈禱が行われているので、上皇様のご病気が回復するのはもちろんのことである。

十三日、晴。町経時朝臣が新年の挨拶に来たので、対面した。殿上の間で酒を飲ませて、帰した。

光台寺風呂始め

光台寺で風呂始めがあった。綾小路前参議・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・隆富朝臣・慶寿丸・梵祐・行豊朝臣の息子である稚児の真光らも行った。沐浴が終わってから、一献の酒宴があった。丁寧なおもてなしであった。

光台寺の幼い稚児は天骨の芸才がある

光台寺の幼い稚児が歌ったり舞ったりした。幼少の者であるが、生まれつきの芸才がある。褒美に御扇を与えた。五献が終わってから、座を立った。その足で隆富朝臣は京へ戻った。

その後、宮家で音楽会をした。平調の万歳楽・三台急・甘州・太平楽急・五常楽急と朗詠などをした。綾小路前参議と長資朝臣も合奏した。

慶寿丸には音楽の才能がある

慶寿丸は一昨年から琵琶を弾いている。特に短い曲を一〜二曲弾かせた。初めて合奏もしてみた。慶寿丸には音楽の才能があると、綾小路前参議は頻りに感心していた。

ところで前典侍禅尼が酒樽などを献上してきた。以前は十一日に酒樽を献上してきたが、立て込んだことがあって、献上が今日になった。すぐだ。すぐにこの酒を味わった。それが数献の酒宴となり、さらには酒盛りとなった。通常の調子ではない雅楽の曲なども演奏され、とても面白かった。十一日は酒盛りがなく（※）興ざめであった。しかし今日はその鬱憤も晴れたので、とても楽しかった。綾小路・田向二人の前参議・重有・長資朝臣・行豊朝臣らが酒宴に参加した。深夜になって、酒盛りは終わった。

上皇御所近辺が火事になる

ところで後に聞いたところでは、京の正親町小路と土御門大路の交差点付近で火事があったそうだ。朝廷や上皇御所の近辺なので大騒ぎになり、御調度品などが運び出されたそうだ。上皇御所の四足門にも火がついたが、打ち消したという。ご無事で何よりである。

※「十一日は酒盛りがなく」…十一日に一献の酒宴はあったが、後小松上皇の病気に遠慮して歌や舞を自粛していた。

十四日、晴。朝早く音楽会をした。盤渉調の曲を八つ、演奏した。綾小路信俊前参議・長資朝臣・慶寿丸も合奏した。音楽会が終わって、綾小路前参議は帰っていった。

台所で田向前参議らと村の男どもも交えて、双六の会があった。夜にはまた私と二条・上臈の三人で双六を打った。私は二条に勝った。十五日、晴。いつものように朝早く御粥を食べた。夕方にはいつものように強飯をお供えして小正月のお祝いをした。田向前参議・重有・行豊朝臣も一緒にお祝いした。長資朝臣は、上皇御所でのご祈祷で灯火を持つ役をするために京都に出て行っているそうだ。

三毬杖見物の群集が宮家の前庭を踏み荒らす

村の松囃子行列が来た。舟津の物真似芸はいろいろとあって、とても面白かった。次に石井村や山村などの行列が来たが、特別な物真似芸はなかった。すぐに山村の木守寺の者たちが三毬杖を焼いた。この三毬杖は、いつものように綾小路前参議・田向前参議・重有朝臣らが進上した。行豊朝臣も毬杖を一本進上した。昨年から宮家の近所でお仕えしているので進上したそうで、神妙なことだ。見物の群集が大勢集まって、前庭などを踏み荒らし、とんでもないことをしてかした。

夜に酒を飲んだ。昨夜の双六で宮家の女性たちが負けたので、その負け態として二条と上臈が酒を用意した。東御方が酒を継ぎ足してくれて、数献の酒宴となった。そしてさらに酒盛りとなった。田向前

参議・重有・行豊朝臣・寿蔵主らも参加した。

その後、台所で男どもが博奕をした。

十六日、晴れていたが、余りにも寒くなり、雪が散った。聞くところによると、踏歌宴会の執行責任者は正親町三条公雅大納言、副責任者は正親町実秀権大納言・清閑寺家俊中納言・裏松義資新中納言・勤修寺経興中納言・高倉永俊参議・花山院持忠参議兼近衛中将・葉室宗豊参議兼右大弁だという。警備責任者は八人で、長資朝臣もその一人だとういう。

権野寺主の酒で、貞成の持斎が無駄になる

権野が来た。そのお土産で酒を飲んだ。私は身を浄めている最中だ。しかし一献の酒に誘惑され、身の浄めが落とされた。罪作りであり、無益なことだ。

即成院の念仏に参列した。宮家の女性たちや田向前参議らも参列した。年始めて食事の施しがある日なので、男女三〜四百人も群れ集まった。

京都柳原から来た松拍を追い出す

十七日、晴。京都から松離子が来た。京の柳原から来たそう。これまで宮家には来なかつた者たちである。上皇様ご病気の最中で鳴り物は遠慮していると命じて、追い出した。

京へ出ていた重有朝臣がすぐに帰ってきた。上皇様のご病気が良くなってきているとのことだった。ただ順調に回復しているわけではないそう。上皇様の近臣たちが昼夜看病を続けている。まだ安心できない病状らしい。

十八日、晴。長資・行豊朝臣が京から帰ってきて、世間話をしてくれた。上皇様のご病気が次第に良くなっている。朝廷でのご祈祷は二十日が最終日の予定だったが、この日は運の悪い日なので最終日を延期することになったそう。長資・行豊朝臣は昨夜、ご祈祷の場で灯火を持

つ役を勤めたという。田向前参議は石清水八幡宮へお参りに行った。

庭田重有ら厄神に参詣する

十九日、大教院隆経法印が来た。少し酒を勤めた後、出ていった。重有・長資・行豊朝臣と慶寿丸は厄神へお参りに行った。

回茶で遊ぶ

二十一日、晴。回茶を行った。賞品は各々持ち寄った。参加者は私・権野・田向前参議・重有・長資・行豊朝臣・慶寿丸・寿蔵主・行光・禅啓・広時らである。面々がいろいろと興味深い賞品を持参したので、面白かった。広時が一番、お茶の種類を当てた。全部で七回勝負して、それぞれの勝者が賞品を取った。残った賞品はくじ引きで取り分けた。そしていつものように一献の酒宴をした。年始めの遊興で、めでたいことである。

二十二日、朝に雪が降った。昼には冷たい嵐が吹き、雪がつむじ風のように舞った。この風に吹かれて、御所と田向家の棟が破損した。

法安寺へ行った。仁王経のご祈祷を始めたそう。

珠侍者が宮家に一献の酒を持参した。雪見酒の用意をしていなかったの、ちょうどいい具合で、珠侍者の心遣いがとてもうれしかった。雪見酒は数献に及び、酒盛りとなった。宮家に来る以前から珠侍者はほろ酔い加減だったので、この酒宴はとても盛り上がった。珠侍者に扇を与えた。夜になってまた一献の酒宴が終わり、すぐに酔い潰れてしまった。田向前参議以下、いつもの面々が雪見酒に参加した。

犬若という芸人の松拍が来る

二十三日、雪が降った。犬若の松離子が来た。いつものように猿楽や歌と舞を披露した。酒と肴を与えた。上皇様のご病気が治ったので、あちこちで松離子をしていますと話していた。

その後、風呂に入った。

二十四日、晴。上皇様のご病気が治ったのはめでたいですとのお祝いの

手紙を、いつものように冷泉永基朝臣を通してお送りした。椎野が自分の寺へ帰っていった。

ところで蔭蔵主松崖が休暇を終えて天龍寺へ戻っていったので、昔のことを思いだして、一首の和歌を彼に送った。

思い出さずや 春より慣れし 去年（こそ）の夢

伏見はつらき 旅寝なりとも

二十六日、晴。郷秋が来たので、音楽会をした。慶雲楽・万歳楽・三台急・甘州・春揚柳・太平楽急・五常楽急、次に双調の春庭楽・鳥急・颯踏入破・賀殿急・胡飲酒破・武徳楽・陵王破を演奏した。長資朝臣は笙と太鼓を兼ねた。

ところで郷秋が語ることには、上皇様は去る十日夜のご病床で御夢想があったそうだ。まず看病に当たっている近臣の人々がなんとか聞いたところによると、上皇様は「大勢の人々がお見舞いに来た。室町殿がいらっしやったのかと思って、起き上がって見たが、人は誰も居ない。不思議に思った」と仰ったそうだ。さらに上皇様は「私は今、夢を見ていたのだ」とだけお話しになった。しかしその御夢想の詳しい内容はお話しにはならなかった。

後小松上皇は蓬萊玉を受け取る夢を見る

ところが次の夜になって、上皇様は次のようにお話しになった。

「私は昨夜と同じような夢を見た。白張（はくちちょう）装束の男二、三十人ばかりがやって来て、持参した珠を献上してきた。それで私が『これは何だ』と尋ねたら、『蓬萊玉』と男たちは答えた。すぐにそれを受け取ったと思った瞬間、夢が覚めた。二夜続けて同様の夢を見たと上皇様は語られたそうだ。すべては諸神が上皇様を擁護なさっている表れであろう。これはご病気が回復する霊夢であり、頼もしいことだという。

茶会

二十七日、晴。茶会があった。先日のお礼として宮家の男どもが準備した。田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣・寿蔵主・行光・禅啓・広時らが参加した。稚児の本玖もいた。賞品を各々が持参した。七回勝負した。寿蔵主が勝った。残る賞品をくじ引きで取り分けた。いつものように一献の酒宴をした。

双六と博奕

茶会が終わってから、双六をした。双六では行豊朝臣が勝った。その後さらに男どもは午前三時過ぎまで博奕をしていた。博奕も行豊朝臣が勝ったそうだ。

二十八日、晴。冷泉正永が新年の挨拶に来た。さて用健が一献の酒宴を準備なさった。寿蔵主に軽食などを準備するよう、お命じになっていた。宮家の女性たちや男どもが大勢集まった。

和漢連句

一献の酒宴の後、梅の花を観に出かけた。私・用健・田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣・慶寿丸・正永・具侍者・稚児の真光らを連れて行った。梅林庵に行ったが、まだ花盛りではなかった。懐紙に書き付けたい和漢連句を三句ほど詠んだ。次に退蔵庵へ行った。庵主と少し話をしてから、帰った。

慈光寺通光が中風で死ぬ

ところで後に聞いたところによると、慈光寺通光三位入道が亡くなったそうだ。この二、三年中風を患っていたが、それが悪化して遂に命を落とすことになった。昔、宮家に功労があった者なので、特にかわいそうに思った。

二十九日、晴。双六の総当たり戦（※）をした。私・田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣・正永・寿蔵主・禅啓らが参戦した。一番勝った者を褒め称えた。

梅見遊覧から戻る女性たちを帰り立ちで迎える

ところで宮家の女性たち、東御方・上臈・二条・今参・塔頭御寮恵芳・智俊・女官らが退蔵庵の梅を観に出かけた。その一行の帰りを酒宴で迎えようと、急に話がまとまった。それで殿上の間を酒宴の座敷にした。屏風なども少し飾った。

田向前参議はもとも酔っていたので、女性たちが帰ったら、すぐに歌ったり舞ったりした。女性たちは戸惑いながらも、田向の歌舞を面白がった。女性たちも出先で飲んできたようだ。すぐに酒盛りとなり、乱舞をするなど、とても楽しかった。

智俊を、このような酒席に初めて召し加えた。それなのに、すぐに一献分の酒代を持参してきた。とりあえずの用意だろうが、神妙なことだ。この智俊を迎えての酒宴一献を明日準備するように、女性たちに命じた。

ところで今出川家に酒樽などを贈った。年始のお礼を今出川公行前左大臣の後家である陽明局に送ったのである。

先日の蔭蔵主との和歌の贈答、彼からは漢詩で応答があった。

静掩禅関山更深 尤欣芳信為相尋

一場春夢是何処 旧業池台喬木陰

※「双六の総当たり戦」：原文では「双六の廻し打ち」とある。

三十日、晴。昨日の智俊の酒代をもとに一献の酒宴をした。宮家には初参なので、特別に銅に金メッキした花瓶と机を智俊に与えた。宮家の女性たちは昨日の帰り立ちのお礼として、今日の酒宴を準備なさった。あれやこれやで酒宴は数献に及んだ。歌や舞など、とても面白かった。

参加者は昨日と同じだ。皆、とても酔っ払って、宴会は終了した。

二月一日、雨が降った。「仲春の良い兆しがあり、朔日のめでたさよ。すべてにおいてとても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。正永が帰ろうとしたが、雨が降ってきたので、引き留め

た。

貞成と冷泉正永の和歌

それで、私の和歌を正永に詠み遣わした。

帰るさの 障りの雨は 今日もなお

留むる心や 空に知るらん

さりとはは いく夜も泊まれ くれ竹の

伏見はつらき 旅寝なりとも

返歌

今日もなお 留まらばやの 心をば

正永

空も知りて 降れる春雨

いく夜とは 限らじものを くれ竹の

伏見の旅寝 万代までも

正月節養

さて廊御方がお部屋に招待して下さって、御節養の酒宴となった。

宮家の女性たち・田向経良の妻である芝殿・田向前参議・長資朝臣・重有朝臣・行豊朝臣・正永・御寮・経良の妹である玄経・智俊らもいた。村人の禅啓ら大勢もいた。一献が何度も巡って、いつものように歌や舞があった。特に正永が採桑老の舞曲を舞ったのが面白かった。

禅啓がお代わりのお酒を用意した。一日中、酒盛りでにぎやかに過ごし、新年をお祝いした。その後、男どもの面々が双六を打った。

二日、晴。このところ連日、大酒を飲み続けている。それに引き替え、今日は暇だ。正永も帰っていった。

春の野遊びで土筆をとる

三日、晴。野遊びに出かけた。田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣・寿蔵主をお供にした。上三栖辺りに行き、土筆をとった。しばらくして帰り、土筆を味わった。その後、少し蹴鞠をした。

法安寺の住職が来た。明日、お寺にお出で下さいとのことだった。

法安寺の風呂

四日、晴。法安寺へ行った。東御方・廊御方・上臈・二条殿・芝殿・田
向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・慶寿丸・稚児の真光らも
連れて行った。局女や女官の目々も同じく来た。村人たちも数人来た。
まず軽食。その後、風呂に入った。そして一献の酒宴の間、和歌を
詠んだ。題は、庭の梅が花盛りである。各々一首詠んで、すぐに皆へ
披露した。

代々を経し 御幸の跡の 庭ふりて

梅も盛りの いく春か見ん 私

代々を経し 君が御幸も 今日ことに

盛りとぞ見る 庭の梅が枝 経良

いく年の 春とか君が 契るらん

梅も盛りの 庭の夕映え 重有

万代の 君が御幸の しるしとや

盛りを見する 庭の梅が枝 長資

一しおは 君が御幸に 色添えて

盛り異なる 庭の梅が枝 行豊

いく春も 君が御幸を 契りつつ

盛り久しき 庭のこの花 慶寿丸

歌の披露が終わって、また一献の酒宴をした。一日中、賑やかなこ
とであった。皆深く酔って、帰っていった。

賢聖障子絵図

五日、雨が降った。行豊朝臣が世尊寺家に代々伝わる手本数巻を持って
来たので、見せてもらった。賢聖障子絵図(※)、この絵図の銘には
世尊寺行俊卿が書いたとある。この障子は現在、内裏にある。すばら
しいものだ。また中国人が書いた巨の文字(※)なども見た。いずれ
も目の保養になった。

伏見上皇や三賢の書

このお礼として宮家を持っている手本である伏見上皇の直筆や三賢
である小野道風・藤原佐理・藤原行成の書などを取り出して見せた。
その後、囲碁・双六・博奕などをして、雨中の暇な時間の慰めとし
た。

※「賢聖障子絵図」…この語には「中書」という割注がある。未詳。

※「中国人が書いた巨の文字」…原文は「巨文字」に「唐書」の割注が
ある。

六日、晴。今日はお彼岸の初日である。身を浄めた。

七日、晴れていたが、夕方になって雨が降った。用健がいらっしやっ
たので、雑談をした。

ところで、宮家の女性たち・御寮・智俊たちが梅林庵の梅を見に
行ったそうだ。田向前参議・重有朝臣・寿蔵主らも酒樽を持って、梅
林庵に押しかけたらしい。内本善祐もまた酒を持参していったとい
う。あれやこれやで大酒を飲み、乱舞までして盛り上がったそうだ。

私はただ一人暇を持て余していたが、御寮がお酒を持参してきてく
れて、楽しかった。田向前参議たちは酔い潰れて、前後も分からない
状態になったらしい。行豊朝臣一人が宮家に来てくれた。女性たちも
戻ってきて、少し酒盛りをした。人数は少なかったが、かえって面白
かった。

九日、晴。今日はお彼岸の中日だ。いつものように身を浄めた。御香宮
に参詣した。宮家の女性たちとも連れだつて即成院へ行き、念仏を唱
えた。即成院善基が酒宴を主催した。身を浄めている最中なので私は
辞退したが、しつこく勧められたので、身を落としてしまった。戒律
を破るのは恐ろしいことだが、楽しかった。しばらくして帰った。

庭田重有の愛妾で女官の賀々が女兒を産む

ところで女官の賀々が今日の明け方、無事、女兒を出産したそうだ。

賀々は重有朝臣の愛妾である。既に六〜七人も子供を産ませている。お盛んなことといえよう。

相国寺喝食の真光は世尊寺行豊の子息

稚児の真光がお寺へ帰った。書道のお手本一卷を真光に与えた。この真光は行豊朝臣の子で、相国寺に住んでいるようだ。

田向家の男女と寿蔵主が物詣でから帰った。庭田家の者たちが坂迎え（※）をして、大酒を飲んだそうだ。

※坂迎え（さかむかえ）：遠い旅から戻る者を村境などで出迎えて、酒宴をすること。

十日、晴。田向家で、昨日の坂迎えのお礼として酒宴が催されたそうだ。**祐誉僧都が瑠璃呉器を貞成の息子に献上した**

十一日、晴。祐誉僧都が一献の酒を持参して来た。息子に青色の宝石で飾られた茶碗を献上してくれた。すばらしい品である。神妙神妙。酒宴には田向前参議以下行豊朝臣らが参加した。蔭蔵主松崖が今年になって初めて来た。

ところで兄の葆光院の御七回忌である。蔵光庵に御仏事料を奉納した。大光明寺へも型通り仏事料を納めた。今夜から御所でお経を読む。比丘尼たち・寿蔵主・即成院善基・同院梵祐が読経に参加してくれた。兄の後家である上臈の部屋で御仏事をした。

治仁王の七回忌

十二日、晴。お彼岸の最終日である。いつものように身を浄めた。

兄・葆光院の御仏事を型通り執行した。蔭蔵主松崖・寿蔵主・即成院主梵基・同院善基・梵祐らが参列した。椎野寺主の浄金剛院でも御仏事をしているそうだ。まず軽食をとった。その後、一時間、いつものようにお経を読んだ。その後また、例によって読経後の軽食に男どももお相伴した。

御仏事が終わって、大光明寺へ行った。東御方・廊御方・上臈・玄

経・田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣・慶寿丸も行った。

足利義持の誕生日祈禱

大光明寺ではちょうど大般若経を略読していた。これは室町殿の御誕生日のご祈禱である。長老は出座していなかった。触穢なので遠慮しているようだ。

姪の鳴滝殿へも御仏事料を少々送った。

十三日、曇。遊山に出た。松崖・田向前参議・重有・行豊ら朝臣・慶寿丸を連れて行った。雨が降ってきたので、指月庵に行った。特に面白いことはなかった。

三木善国の酒

宮家に帰ってから酒を飲んだ。この酒は地侍の三木善国が献上してきたものだった。善国はこの一〜二年、宮家へ仕えてこなかった。今年の春からまたお仕えします、ということなので、その挨拶代わりの酒なのであろう。

琵琶法師の米一座頭

十四日、晴。風呂に入った。その後、行豊朝臣が琵琶法師の米一座頭を連れて来た。まだ初心者だそうだ。しかし、語りの声に問題はない。

平家物語二〜三句と小歌などを演じた。

京都三条辺りの遊君の家が焼ける

聞いたところによると、京辺りで火事があったそうだ。三条あたりの遊君の家が焼けたという。

即成院善基・梵祐が宮家で舍利会講式・和讃を勤仕する

十五日、晴。いつものように涅槃会をした。涅槃像への捧げ物を宮家の男女が献上した。即成院の善基と梵祐が来て、いつものように舍利会の講式や和讃などを勤めてくれた。田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣が参列した。釈迦念仏を唱えた。

十六日、晴。大光明寺が花盛りなので、遊覧しに行った。田向前参議・

重有・長資・行豊ら朝臣・慶寿丸・寿蔵主を連れて行った。今年は特に花の咲き具合がすばらしい。酒樽を一つ携えて、不動堂で花見酒をした。

神変無尽の獅子舞

帰り道で、獅子舞と出会った。そのまますぐに御所へ来た。太刀・刀を抜き、限りなく踊り狂うが、洗練されてはいない。ただその姿は不思議に変幻自在なありさまだった。扇などを与えた。

さて常盤井宮の娘である勸修寺御比丘尼が明日、いらっしゃると連絡があったので、お迎えする準備で忙しい。おもてなしのご馳走を準備するよう、寿蔵主に命じた。勸修寺御比丘尼はこの七〇八ヶ年、ずっと宮家にはいらっしゃらなかった。私の代になってからは初めての事である。

夜、いつものように即成院の念仏会に参列した。

常盤井宮の娘・勸修寺御比丘尼が来臨する

十七日、晴。勸修寺御比丘尼がいらっしゃった。善首座・何々という蔵主や稚児たちもお供してきた。お土産にお弁当箱三つと酒樽など、いろいろといただいた。お弁当箱は、蒔絵を施した手箱で、古今・後撰・拾遺と銘が書かれている、すばらしい品であった。常盤井殿の御品だそうだ。このような勸撰三代集のお弁当箱は珍しく、目の保養となった。すぐにお会いして、酒宴となった。

船遊びをする

そしておもてなしとして、船遊びを実施した。これは寿蔵主が手配してくれた。まず退蔵庵・大光明寺の花を遊覧した。次に指月庵へ行き、東津から船に乗った。私・息子・勸修寺御住職・東御方・廊御方・二条殿・御寮・玄経・善首座・某蔵主・稚児・田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣・慶寿丸・寿蔵主・稚児の本玖・稚児の某らが船に乗った。

琵琶法師の米一座頭

川上へ漕ぎ廻した。勸修寺御住職は特に喜びになっていた。雅楽の曲を三つ、長資朝臣が笙、私が琵琶で演奏した。音楽など興味は尽きなかった。琵琶法師の米一座頭を呼び出して、平家物語などいろいろの芸をさせた。とても面白かった。夜になって帰った。

その後、宮家の女性たちや男どもは酒樽一つを携えて塔頭大通院（※）に行き、終夜、酒盛りや乱舞で楽しんだそうだ。私は酔い潰れて眠っていたので、この事は後になって聞いた。

※「塔頭大通院」…原文ではただ「塔頭」とのみ書かれている。

十八日、晴。勸修寺御住職がご滞在中で、前庭の花見の酒宴をした。面白かった。三献の酒宴を終えて、お客人はお帰りになった。お父上の常盤井殿が勸修寺門跡にいらっしゃるといっているので、急いで京都へお帰りになったのである。

今出川実富の弟・洪珉侍者が来る

ところで、洪珉侍者がいらっしゃった。洪珉侍者は相国寺に住んでいる。今出川実富前大納言の弟だ。この伏見へは初めて来たそうだ。かつて私が住んでいた頃の今出川家でお会いして以来、初めてお会いした。珍しいことで、うれしかった。しばらく雑談して、すぐに帰っていった。

前庭の花見をするので、芝殿と惣得庵主を呼んで花見酒を飲んだ。その後、松崖・宮家の女性たち・長資・行豊ら朝臣は大光明寺の花を遊覧しに出かけた。宮家に残った私・芝殿・惣得庵主・田向前参議・重有朝臣は酔っていたので、面々が太光明寺から戻ってくるのを待つた。

妙見社の前、馬場の花の下に畳を敷いて、酒樽を用意した。宮家の女性たちが帰ってくるのをそこで引き留めた。面々は戸惑っていたが、面白かった。またここで酒盛りとなった。

一日中、酒を飲みながら花見をした。近来ではとても面白い酒宴であった。とても酔ってしまつて、当座の酒盛りにも出てしまった。これも楽しかった。

山田宮の拜殿で酒宴をする

十九日、晴。昨日の花見酒のお返しとして酒宴を、松崖・宮家の女性の東御方・上臈・二条殿、それに長資・行豊ら朝臣が主催した。山田宮の拜殿に酒樽を置き、村人たちや琵琶法師の米一座頭らが待ち構えていた。酒盛りや歌舞など、その面白さは限りなかった。

酔狂の余り、惣得庵へ押しかけた。女性陣は宮家へ逃げ帰つたが、私はしばらく惣得庵に落ち着いていた。そうしたらまた酒盛りとなつた。夜になつて宮家へ帰つた。

留守の間、椎野が来ていた。椎野のお見送りでまた一献の酒宴があった。

二十日、晴。前庭の花の下で、少し花見酒を飲んだ。先日の涅槃会の供物をくじ引きで宮家の男女が取り分けた。

護正院宮と円満院宮の皇族同士が殺し合う

ところで後に聞いたところでは、今日、護正院宮と前の円満院宮の間で争い事があつたそうだ。円満院宮と護正院宮の二人が同じ輿に乗っていた際、輿の中で円満院宮が護正院宮を刺し殺そうとした。ところがかえつて円満院宮の方が刺し殺されたという。護正院宮も怪我をしたらしい。その状況を詳しく記すのはやめよう。不思議なことである。円満院宮は狂気の人だそうだ。

二十一日、雨が降つた。椎野のお寺・浄金剛院の敷地に関して負債があるらしい。その件で、細川基之阿波守に対して椎野が言いたいことがあるそうで、重有朝臣が椎野の使者として細川の屋敷に向かった。すぐに帰ってきて、椎野に事情を報告したようだ。細川は承諾しなかつたらしい。

二十二日、雨が降つた。来たる二十五日に北野天満宮に奉納するため、和歌の題を出した。行豊朝臣にその題を清書させ、面々に配つた。

小川宮、兄称光天皇飼育の羊を殴り殺す

ところで聞くところによると、天皇陛下が飼育なさつていた羊を弟の小川宮が欲しがつたので、お与えになつた。ところが小川宮はすぐにその羊を殴り殺してしまつた。そのことだけでなく、陛下ご弟の仲がいろいろと険悪になつていふという噂が流れている。よろしくないことだ。

紙の博奕

夜、松崖が酒宴を開いた。田向前参議以下、浄金剛院の僧である観悟らも参加した。その後、紙の博奕(※)があつた。

※「紙の博奕」：原文通り。内容は未詳。

二十三日、晴。遊山に出て、松を掘らせた。田向前参議・重有・長資・行豊朝臣・慶寿丸を連れて行つた。即成院に行き、少し酒を飲んだ。

小川禅啓宅の松の大木

帰り道、小川禅啓の屋敷に行き、庭の松を伺い見た。この松が欲しいと思つたが、大きな松だったので、あきらめた。しばらくして帰つた。前庭に掘つてきた松を植えた。

禅啓が来た。留守中に私の屋敷を御覧くださり、恐れ多いことございましてと言つて、酒樽などを持参してきた。それで一献の酒宴となり、大酒を飲んだ。思いがけない心配りであつた。

後小松上皇の御湯始め

二十四日、晴。後小松上皇様が、ご病氣全快以後、はじめてお風呂に入つたそうだ。それで面々がお祝いに御馬を献上したという。それで宮家からも御馬一頭の代銭二貫文を、冷泉永基朝臣を通して献上した。永基はこの銭を事務担当の広橋兼宣に渡したそうだ。

馬の代銭額は諸人でもこの程度だと聞いたので、他と同様にしよう

と思った次第である。少額であったのは良くなかったかもしれない。永基朝臣を通して上皇様からのお返事があり、病気が治ったのはめでたく、お祝いをいただいたのはうれしく存じますとのことだった。

足利義持からの献上品

室町殿は上皇様に綾の御服五着・御夜着二揃い・御羽織二着を贈られたそうだ。お風呂上がりにお召し替え下さいと室町殿からご連絡があったという。その他、諸門跡・九条満教関白・公卿・殿上人からも献上品があったそうだ。

医師三位房への褒賞

それで献上品は御馬八頭・御馬の代銭五十貫文・太刀三十二振りになったという。そのほとんどが医師の三位房に与えられた。この他にも御衣一着・御夜着二揃い・お盆・香箱・食籠・台付きの呉器（※）・銭五十貫文も三位房にお与えになった。また室町殿からも銭五十貫文が特別に与えられたそうだ。三位房はいちやく大金持ちとなり、希に見る名誉なことであろう。

※台付きの呉器（ごき）：高台の付いた抹茶茶碗。

北野天満宮奉納の和歌と連歌

二十五日、雨が降ったが、夕方には晴れた。北野天満宮奉納の和歌や連歌の会を行った。座敷を少し飾った。屏風を立て、天神様の名号「南無天満自在天神」の掛け軸や中国風の絵などを懸けた。

まず和歌の披露があった。歌人は私・椎野（漢詩）・用健（漢詩）・今日は欠席）・松崖（漢詩）・二条為定の娘である芳徳庵主（欠席）・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・慶寿丸・冷泉正永（欠席）・大光明寺の僧である慈竜維那（漢詩）・欠席）・珠侍者（漢詩）である。

次に連歌。参加者は私・椎野・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・慶寿丸・即成院善基・梵祐・稚児の澄薫・稚児の本玖・具

侍者・行光・禅啓らである。午後九時に百韻詠み終わった。そしていつものように一献の酒宴をした。今年になって初めての連歌会だった。無事終了してめでたいことである。

二十六日、晴。前庭に松や秋草などを植えた。

博奕の会

二十七日、晴。いつものように風呂に入った。夜に博奕の会があった。重有・長資・行豊朝臣らが行った。

遊山でゼンマイを採る

二十八日、晴。遊山に出て、紫蔵（ゼンマイ）を採った。松崖・二条・上臈・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・慶寿丸を連れて行った。女官のめ、も同じく来た。惣得庵主と明元に会った。不動堂で惣得庵主が酒宴を開いた。しばらくして帰った。宮家の女性二人、二条と上臈を惣得庵主が庵に招いて行った。その後、松崖・重有朝臣・長資朝臣が酒樽を携えて惣得庵へ行った。

二十九日、晴。松崖が天龍寺へ帰っていった。

足利義持、猿楽役者の梅若を上皇御所へ連れて行く

聞くところによると、室町殿が今日、上皇御所へ行ったそうだ。上皇様のご病気が治ってから初めてのことだという。猿楽役者の梅若を連れて行ったらしい。

ところで尼寺の入江殿には現在、住職がいない。そこで崇光上皇の娘である長照院殿を入江殿にお入れしたらいかかかと、室町殿からお話があったそうだ。もとよりご本望のことであったので、お喜びになっただけでいらっしやる。お祝いの手紙を差し上げた。

京六条の生島明盛宅が焼ける

今夜、今日の六条辺りで火事があったそうだ。明盛法橋の屋敷も焼失したという。とてもかわいそうなことだ。

琵琶法師の米一

三月一日、晴。「めでたい兆しがあり、とても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。田向前参議以下もお祝いに参加した。琵琶法師の米一が平家物語を語った。

世尊寺行豊に男子が産まれる

二日、晴。浄金剛院の観悟が酒樽一つを持参してきた。それで対面して、酒を飲んだ。今夜、行豊朝臣の妻が男子を産んだそうだ。

桃の節供に鬪鶏をする

三日、雨が降った。「桃の花宴で、めでたい」と予祝した。鬪鶏を二、三番行った。いつものように御節供のお祝いをした。田向前参議・重有・長資・行豊ら朝臣がお祝いに参加した。

ところで惣得庵主が先日の遊びで度々酒宴のご用意を下さった。そのお返しとして、酒一献分の銭少々を惣得庵へ持参した。雨を凌いで皆で惣得庵へ行った。廊御方と二条殿も一緒だった。田向前参議以下、宮家の男どもは皆付いてきた。庵主は殊の外お喜びで、酒を飲ませていただいたて帰った。

椎野が宮家で留守番をなさっていたので、惣得庵主は酒樽を携え、廊御方のお部屋までいらつしゃった。とてもご丁寧なことである。

さていつものように今日から百日間、琵琶の稽古を始めた。

芝殿が壬生地蔵に参籠する

七日、晴。酒を飲んだ。田向経良の妻・芝殿が壬生地蔵に七日間お籠もりをしている。その留守を守っている田向経良前参議・田向長資と世尊寺行豊朝臣らを慰めるため、宮家の女性たちが酒宴を主催したのである。

十日、晴。いつものように御香宮で猿楽が演じられる。元のように落ちて着いた楽頭の矢田が猿楽を執行するそうだ。智俊が酒樽一つを持参してきた。猿楽の内祭として楽しく酒を飲んだ。

十一日、雨が降ったので、御香宮猿楽は延期になった。

十二日、晴。御香宮猿楽は六番演じられたそうだ。田向前参議と長資朝臣親子が準備した酒宴で酒を飲んだ。

播磨国垂水郷

さて常光院堯尋僧都が来た。田向家に対して文句があるそうだ。播磨国垂水郷について去年から田向家と訴訟になっている。堯尋が現在、垂水郷を実効支配しており、それを証明する書類もあるという。堯尋に分のある訴訟だと演説した。堯尋に道理がないわけでもないので、考えてみようかと返答しておいた。

十三日、晴。宮家の女性たちは山田へ行った。留守番で暇なので、重有・長資朝臣と双六の勝ち抜き戦(※)をした。

※「双六の勝ち抜き戦」：原文は「双六の打ち勝ちあり」。

貝覆いで遊ぶ

十四日、大雨が降った。双六をした。その後、女性たちや男どもと貝合わせをした。女性たちが一組になり、男性たちがもう一組となった。

女性の組が負けた。それで負け態として女性たちが酒を用意して酒宴となった。寿蔵主も参加した。雨の中、一興だった。

十五日、晴。賀々が産所から戻ってきた。賀々が少し御酒を用意したというので、飲んだ。

なるみ大夫は腫れ物の名医

十六日、晴。いつものように風呂へ入った。椎野の腫れ物(※)がなかなか治らないので、医師のなるみ大夫が来て治療した。なるみ大夫は腫れ物の名医である。

※「腫れ物」：原文には「雑熱」とある。

十七日、晴。勧修寺経興中納言が書状で知らせてきたことには、明日、室町殿の息子義量殿の将軍任命令が出されるそうだ。公家でも武家でもお祝いの品を出さない者はいないだろうとのことだった。御馬か太

刀のいずれかを室町殿と子息殿の両方へ差し上げるのがいいでしょうと、念入りに助言してくれた。このように知らせてくれたのは、神妙なことである。太刀を用意すると、勧修寺には返事をしておいた。十八日、晴。朝廷の地方官任命式が行われた。執筆役は洞院満季大納言だそう。將軍任命式の執行責任者も洞院満季だという。

貝合わせの雪辱戦でもたも女性陣が負ける

十九日、先日の貝合わせで官家の女性たちが負けたのが、とても口惜しかったらしい。それで妬ましく、再度、貝合わせをすることになった。組は先日と同様、女性陣と男性陣だった。それでまた男性の組が勝ってしまった。今回は二番勝負をして、いずれも男性陣の勝ちだった。なんと名誉なことであろうか。また負け態を女性陣に強制し彼女たちに酒を用意させて、酒宴を行った。

足利義量の將軍就任に参賀の諸人が群参する

二十日、晴。將軍新任の件で、大勢が群れ集まってお祝いをした。御馬や太刀が贈られたそう。

最近では銀作りの太刀は贈答しない

宮家からも太刀を贈ろうとしたが、見出した太刀は銀作りの太刀だった。最近では銀作りの太刀は贈り物に用いないので、とうとう贈答の太刀が間に合わなくなってしまった。それで、今日のところはお贈りできなかった。無念である。

足利義持は出家する意向

室町殿は石清水八幡宮に三日間お籠もりするそう。どうやら出家するご意向らしい。それで義量殿の將軍任命ということになったようだ。

今夜は地方官任命式の最終日である。

今出川家の琵琶「巖」

二十一日、晴。綾小路信俊前参議が来た。綾小路は今出川家の琵琶のこ

とで話があつて、来たという。

私は、今出川家の琵琶「巖」を預かりたいと何度も今出川家に申し入れていた。今出川公行前左大臣の後家である陽明禪尼は、私にお預けしてもよろしいという考えだった。

ところが、田村入道は私に預けることには反対だった。それで田村入道が偽りを言つて、正親町三条公雅大納言を通して後小松上皇へ「巖」を献上してしまつたそう。上皇御所に召し置かれていながら、問題はない。しかし何度もこちらから申し入れをしたのに行き違ひになつてしまつたのは、とても残念だった。入道の行いは感心しない。残念無念。

綾小路が宮家に滞在して、酒宴を準備してくれた。そして音楽会をした。黄鐘調の曲七つと朗詠をした。

二十二日、晴。綾小路前参議が帰る前に音楽会をした。太食調の曲七つと朗詠をした。長資朝臣も合奏した。音楽会が終わつて綾小路前参議は帰つていった。琵琶「巖」の件を今出川家や正親町三条公雅に話しておくように、綾小路前参議に命じた。

足利義持に黒金覆輪太刀、義量に白作りの太刀を贈る

さて新將軍祝賀の件で、田向前参議が使者として京都へ出かけた。室町殿へは黒金覆輪(※)の御太刀、將軍には白作り(※)の御太刀を進上した。

夜になつて田向前参議が帰ってきた。室町殿は石清水八幡宮からお戻りで、その後すぐに北野天満宮へお参りされたそう。夜になつて室町御所へお帰りになつたので、すぐに高倉永藤卿を通して、御太刀を進上した。めでたくありがたいことですとのお返事だった。

將軍には近習の三淵を通して御太刀を献上した。お返事は室町殿と同様であつたそう。

※黒金覆輪(くろきんぶくりん)：黒漆塗りで鞘などの周囲を金で覆つ

た太刀。

※白作り（しろつくり）：黒漆で塗りこめるが、ところどころを白く塗り残した太刀。

二十四日、晴。室町殿は今日、伊勢神宮へ参拝なさったそう。

播磨国飾磨津別符

ところで先だって、播磨国飾磨津別符の現地支配権を鹿王院へ寄付した。以前の領主であった萩原殿直仁親王の娘である御比丘尼が、鹿王院へ現地の支配権を寄付したそう。その由緒を鹿王院が訴えてきたので、新しい領主として改めて現地の支配権を同院へ寄付したのだ。

今回の寄付にいたる経緯は以下の通りだ。この飾磨津別符の現地支配を光照院経増が力尽くで奪い取ったので、鹿王院は支配できなくなったそう。ところが去る二月、経増が変死した。

それで現地の支配者が不在となったので、本照院大納言法印が飾磨津別符と関わりがあると主張し、証拠書類をお見せしますから飾磨津別符を私にお預け下さいと宮家に願ひ出てきた。この領地の租税はしっかりと収納しますと元妙を通じて申し入れてきた。

また軽々しく本照院へ命令書を与えるのはどうかと思ひ、宮家の面々と協議した。鹿王院に寄付したとはいっても、現在、同院は飾磨津別符を実質的に支配していないのだから異論を差し挟む余地はないというのが、面々の意見だった。それで重有朝臣が執筆して、本照院に命令書を与えた。それで本照院は、そのお礼として酒一献分の錢三貫文を献上してきた。書類を書いた重有朝臣にも同じようにお礼の錢が献上されたそう。

飾磨津別符は本来の租税が十貫文程度の小さな領地である。それで本照院は上納金として毎年三貫文お納めしますと言ってきた。以前、光照院経増が現地を支配している時は、毎年五貫文を上納していた。

それに準拠して上納しなさいと本照院に命じたが、難色を示していた。以上のような経緯があつて、最終的には元通りに鹿王院へ現地の管理権が戻ったのは、めでたいことである。

二十五日、晴。本照院が献上した錢で一献の祝宴をして、鹿王院の飾磨津別符支配がうまく行くようにお祝いをした。用健がいらつしゃつた。智俊がたびたび一献の酒宴を準備してくれるので、今回の酒宴に呼び寄せた。酒宴には田向前参議以下、行豊朝臣や具侍者も参加した。

白川資忠らの一行が伏見を訪れ、船遊びをした

二十七日、晴。行蔵庵へ白川資忠王二位神祇伯が来たそう。清閑寺家俊中納言・中御門宣輔中納言・広橋宣光藏人頭兼弁官・白川資兼神祇伯兼近衛中将・吉田神社の兼豊ら大勢も同道したという。船に乗って楽しんでさう。

田向前参議もその船に乗り込んだ。これは広橋藏人頭兼弁官が伏見に初めて来たので、取り次ぎ役として日頃から世話になっているお礼の気持ちを表すために乗船したという。それで、田向前参議は船中で一献の酒宴も主催したそう。皆が面白がつて、釣り糸も垂れて、大酒を飲んだという。

二十九日、雨が降った。三月も今日で終わり、名残が尽きない。それで特に「三月尽くし」という和歌の題を出した。いつもの人数に短冊を配ったが、和歌の披露はしなかった。当番の幹事に差し障りがあつたので、和歌を披露する会は延期になった。

それで急に連歌を懐紙一折り分をやることにした。人数が少ないので、五十韻詠んで中断した。椎野・田向前参議以下、行豊朝臣や即成院善基らがこの連歌会に参加した。

四月一日、小雨が降った。「孟夏の季節、朔日の慶びでとても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

今出川家秘蔵の琵琶「新序」

綾小路信俊前参議が今出川家の「新序」という名の琵琶を持参してきた。陽明禅尼が「この琵琶を宮家にお預けします」と言っていたそう。この琵琶は西園寺実兼以来、代々今出川家に伝えられてきた秘蔵の琵琶である。亡くなった今出川公行前左大臣が朝夕、稽古のために弾いていた琵琶だ。これを預けてもらえたのは、うれしいことだ。その一方で悲しみもこみあげてきた。

後小松上皇、琵琶「巖」を伏見宮家へ預ける

琵琶「巖」について、上皇様が宮家にこの琵琶をお預け下さるとお決めになったそう。まずもってこのお心遣いは、恐れ多くうれしいことである。

綾小路前参議が一献の酒宴を用意してくれた。それが数献にも及んだ。音楽会をした。早速、「新序」を試しに弾いてみた。材質は粗末であるが、音量のある楽器である。今出川家が再興された暁には、お返ししなければならぬ。でもそうでなければ、私の楽器ということになる。とてもうれしかった。

播磨国垂水郷

二日、雨が降った。常光院主が来た。播磨国垂水郷の権利書類原本を持参してきた。由緒正しい証拠書類があるので、仕方ない。訴訟は中止するよう、田向家に命じた。この措置に対するお礼として、常光院主はお酒一献分の銭三貫文を献上してきた。田向家にも同様のお礼をするという。

常光院主、柿の葉に和歌を書く

宮家から退出する時、路次から柿の葉に書き付けた和歌一首を常光院主は献上した。

今日よりぞ 千代も仰がん 伏見山

竹の園生（そのふ）の 深き恵みを

常光院主の家柄は、代々歌人である。その遺風もとても優美である。とくに柿の葉に和歌を書き付けるといのは、先例にあることだ。感動した。

先日の三月尽くしの和歌をただいま披露した。綾小路前参議・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣が和歌を読み上げた。その後、酒宴となった。ただいまの常光院主からの礼銭で買った酒を味わった。音楽会をした。いつものように平調の曲八つと朗詠などをした。

【頭書】（＝日記の上方の隙間に書き加えた記事）常光院主は田向家に来たが、御所へは来なかった。私も思うところがあつて、対面しなかった。

三日、晴。朝早く音楽会をした。盤渉調の曲を八つ演奏した。綾小路前参議と長資朝臣が合奏した。昼にまた右楽を二〜三曲、夜に右楽を二〜三曲、それぞれ特別に練習した。周昭王穆王（※）という朗詠を習った。

常光院主への返歌

さて常光院主との和歌の贈答であるが、田向前参議に常光院主宛ての書状を書かせた。その書状に私の返歌を書き付けた。

伏見山 問わるる宿は 旧りぬとも

昔の跡を 思い忘るな

和歌の浦や 代々に変わらぬ 跡なれば

甲斐ある玉の 光をぞ見る

今夜、京の三条あたりで火事があつたそう。その後また、七条辺りが炎上したという。

※周昭王穆王：『新撰朗詠集』帝王六一六「隆周之昭王穆王」。

四日、晴。綾小路前参議が帰っていった。琵琶「新序」のこと、今出川家に感謝の意を表すため、そのお礼として酒一樽分の銭一貫文を送った。少額ではあるが、私の気持ちを示したまでである。この件で綾小

路前参議に今出川家へ行くよう命じた。

ところで毎月恒例の連歌会を、綾小路路前参議が準備してくれた。綾小路前参議は去年、幹事役を勤めなかったので、そのかわりに準備させたのである。ただし幹事の綾小路は準備だけして、連歌会が始まる前に帰っていった。参加者はいつものように椎野寺主・田向前参議・重有・長資・行豊朝臣・即成院善基・禅啓らである。

さて常光院主から昨日の返事が来た。和歌の浦の御和歌には特に恐れ入りましたと返事にあつた。それにまた返歌が檀紙に書かれていた。筆跡も優美である。

照らし見る 光ぞ高き 和歌の浦や

代々に及ばぬ 浪の下草

五日、晴。椎野が寺に帰った。いつものように風呂に入った。その後、酒を飲んだ。先日の貝合わせで、女性陣が二度とも負けて、負け態として二回の酒宴を開いてくれた。それで今回は男性陣が酒宴を主催して、女性陣への感謝の気持ちを表したのである。

八日、晴。御香宮へお参りし、その後、大光明寺にもお参りした。仏生会の浴仏の儀式に参列した。重有・長資ら朝臣も参列した。

綾小路前参議が来た。正親町三条公雅大納言と大事な用件を相談した。その返事を伝えるのである。また琵琶「新序」を預かって私がとても喜んでいることを、今出川家に伝えてもらった。それで綾小路前参議には、あちらこちら奔走してもらった。話が済んで、綾小路はすぐに帰っていった。

宝蔵絵

十三日、晴。宝蔵絵を見た。行豊朝臣は初めて宝蔵絵を拝見したという。行豊に宝蔵絵に書かれた詞書きを読ませた。

蘇合四帖を暗譜する

十五日、晴。夏の修行期間が始まったので、いつものようにお経を読む

だ。夏の修行期間中、これもまた恒例だが、琵琶の稽古をする。今回は、蘇合四帖を暗譜しようと思う。

十六日、晴。即成院の念仏会に参列した。いつものように宮家の女性たちや男どもも参列した。

園基秀の来訪

十七日、晴。園基秀前中納言が来た。思いがけない来訪で珍しいので、喜んで対面した。琵琶のことなどを雑談した。

琵琶「卯の花」と「虎」に失望する

宮家に人がいないので、合奏まではできなかった。園一人が琵琶を弾いた。「卯の花」の琵琶で、三台急・五常樂急・太平樂急を弾かせた。また「虎」という琵琶で、林歌と鶏徳を弾かせた。楽器の善し悪しを試すために、二つの琵琶で弾かせたのである。

園の腕前は問題ないが、いずれの琵琶もまったくいい音が出なかった。二人ともいずれの琵琶にも感心せず、お互いにつかりした。しかしこの末の世でありながら、園の腕前は希有の器量である。私は思うところあって、琵琶を弾かなかった。園の演奏をただひたすら聴いていたばかりだった。

その後、殿上の間で園に酒を勧めた。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣らにも園と面会させた。しばらくして、園は帰っていった。

二十三日、晴。今日は賀茂祭である。典侍役は、日野有光中納言の娘が務めたそうだ。宮家でも内祭を少し行った。

目勝ちを打つ

内祭の後、にらめっこをして遊んだ。宮家の女性たち・田向前参議以下行豊朝臣や寿蔵主らがにらめっこをした。その後、酒を飲んだ。そしていつものように風呂に入った。

足利尊氏の追善供養を再興する

二十五日、雨が降った。等持寺法華八講が、今日から始まった。これは

等持院殿故足利尊氏贈左大臣の追善供養である。貞和年間（一三四五～五〇）以降中絶していたが、それを再興して行われたそう。来月にはまた鹿苑院殿故足利義満殿の追善供養で法華八講が行われるという。度重なる法会で僧侶も俗人も慌ただしいようだ。

足利義持が出家する

ところで今夜、室町殿が等持院で出家なさったそう。このことは春から噂になっており、今月には出家するらしいと持ちきりだった。しかし、六月に延期になったという話も出ていた。話がはつきりしないまま、今日、急に実施となった。ここに来て、道を求める心が強まったのは、長寿を願うため（※）だそう。このことに、日本国中の人々が驚いた。

後小松上皇も出家を希望している

後小松上皇様もご出家の希望がお有りらしい。しかしその時期は未定らしい。

※「長寿を願うため」：原文では「寿限長久のため」とある。

二十七日、雨が降った。室町殿ご出家の情報が、いろいろな方からもたらされた。急いで室町殿へお見舞いを申し入れるべきですと、宮家の面々が力説した。しかし誰も遠慮して、お見舞いを申し入れていないらしい。私も状況を伺うことにしよう。

烏丸豊光がお供の出家をする

室町殿は昨日から等持寺にいらっしやるそう。烏丸豊光中納言も室町殿のお供をして出家したらしい。その他にも公家や武家で多くの人々がお供の出家を望んでいる。しかし、それには室町殿のお許しが出されていないという。

二十九日、雨が降った。行豊朝臣が京から帰ってきて、状況を話してくれた。法華八講は今日が最終日で、それに出仕した公卿は十六～七人だけだという。

法華八講の願文は五条為清が起草した

願文は五条為清朝臣が起草して、行豊朝臣が清書した。願文の草案を一通り見てみた。現在、菅原家の血を引く者は数人いるが、儒教の教えを守っているのは為清ただ一人だと言われている。末代の世にあつて、為清は希に見る幸運な人と言えよう。（続）